



新田開発の功労者田中正成の眠る「地藏山」

京成「市川真間駅」の南に、松の木でこんもりとおおわれた墓地があります。その中央が小高くなって、大きなお地藏さまが建っています。そのことからこの場所は、一般に「地藏山」と呼ばれています。

このお地藏さまは、市川新田の開発者である田中正成の墓碑で、新田の地名はこの正成によって開発された地域を「市川新田」と呼んだところから起こったものです。正成は明暦元年（一六五五）九月四日に没しており、子孫は代々新田村の名主を務めていました。

江戸時代の新田村は、今の国道14号線に沿ってわずかに農家とその両側に並ぶ程度で、ナシやモモ、ブドウの栽培が盛んに行われていました。しかし、明治の中ごろには果樹が老朽化して、生産が上がらなくなってきたのです。このとき、

イチゴ栽培で知られる

新 田

後藤弥五右衛門は、イチゴの試植に懸命でしたが、明治三十五年その栽培に成功すると、イチゴ栽培は新田一帯に広まりました。そして、大正時代の耕地整理の結果、国道南部に耕地を高く盛った島畑が激増し、そこにイチゴを栽培するよう

になり、大正六年には市川新田果物組合が結成され、イチゴの共同出荷が行われるようになりました。

ところが、昭和六年には栽培地が平田、菅野に広まり、生産過剰で価格暴落の兆しが見られたため、量より質の出荷を目標に品種改良を行い「市川新田苺生産組合」が結成されました。当時、東京市場のイチゴ総取引量は二五〇万箱といわれ、その二割、約五〇万箱が市川イチゴで占められました。

昭和十年、後藤銀次郎らによって露地イチゴ「マーシャル」が導入されましたが、太平洋戦争のため栽培が禁止されてしまいました。戦後、イチゴ栽培が復活し、三十年には清浄栽培と共に鮮度の点から、早朝に切り出して出荷したため「市川の朝摘み苺」として名声を博しました。栽培地域も新田、平田、菅野から八幡、須和田、稲荷木へと広まり、生産量七四万箱のうち東京出荷は五〇万箱でした。しかし、四十年代には宅地化が進み、栽培面積は減少の一途をたどり、ついに市場から姿を消すことになりました。



新田は当初、市川新田と呼ばれましたが、昭和二十六年新田町一〜四丁目となり、四十三年住居表示の実施で新田一〜五丁目となりました。

次回は「宮久保」を予定しています。

（社会教育指導員

綿貫喜郎）